『欧州アルプス たそがれ隊報告』（その１）

～久し振りの海外 4000m 峰登頂～

大塚　忠彦

◎期日　2014 年７月９日～２４日　（シャモニー、ツェルマット、グリンデルワルトの全行程）

◎メンバー　赤澤（L）、坂井、川崎、大塚

ブライトホルン中腹をヨタヨタと

広大な長い長い雪の斜面をウンウン唸りながら、ヨタヨタと登って行った。秀麗なマッターホルンが始終後方に眺められ、また登山口であるクライン・マッターホルンの針峰も直ぐ足下に屹立していて素晴らしい景観であったが、ヨロヨロの私メにはこれらの景観を楽しむ余裕は残念ながら無かった。

ここは、スイスのツェルマットからロープウェイで小１時間ほどの終点「マッターホルン・グレッシャー・パラダイス」と呼ばれるスキー場駅のトンネルを出てから、目の前に広がる広大なブライトホルン(4164m)をその中腹まで登って来た所である。沢山のパーティーが入山していて、広大な中腹のトレースにポツポツと連なって登って行く。

（ブライトホルンの広大な斜面に付けられたトレースに点々とパーティーが・・）

ガイドパーティーや若者パーティーが多いようだ。我がパーティーは全てのパーティーに道を譲ったが、我々が追い抜いたパーティーは１パーティーも無かった。他の３人は元気モリモリであったのだが、トップを行かされる小生の足並みがどうにも遅れ気味なのであった（上のヨタヨタ写真参照）。

さて、この続きは後述するとして、話を初っ端に戻そう。

赤澤さんから欧州アルプスに行かないかとお誘いを受けたのは昨年の秋頃のことであった。彼は若い頃モンブランにもマッターホルンにも登っていて、特にモンブランはガイドレスで登ったそうで、アルプ

ス事情にも精通しているので、何かと心強い。馬が合う４人でパーティーを組み、正月過ぎには早々と飛行機もアルプスでの宿も全て予約を完了してくれた。４人とも古稀を越えているので、「アルプスたそがれ隊」と命名し、ややこしい山は敬遠してタソガレに相応しい易しい山々をターゲットとして選んで貰った。その結果、地域は下記の３箇所を約５日間づつとして、それぞれの地域のターゲットは以下のような4,000m峰となった。

◎シャモニー（フランス）：モンブラン・ドュ・タキュール（4248m）

◎ツェルマット（スイス）：ブライトホルン（4164m）

◎グリンデルワルト（スイス）：メンヒ（4207m）及びユングフラウ（4158m）

ガイドを雇えば安全性は増すであろうが、我々タソガレ隊にはガイド登山のスピードに付いて行ける体力も無いので、“ハイッ、ここでオシマイ！”とリタイアさせられるのがオチであるから、気儘なガイドレスの個人登山とした。

いずれも氷河上の歩行がある山なので、クレバスに墜落しない歩き方やアンザイレン法、コンテの方法、クレバスからの登り返しや引き上げ法なども谷川岳や富士山などで実地訓練を行い、また、高度順応のために何回か富士山にも登った。しかし、クレバス墜落からの登り返しや引き上げは、我々ロートルが行うことは実際には難しいことが分かったので、アンザイレン中の誰かがクレバスに墜落したら他の３人で墜落を途中でストップさせることが関の山であって、その後のレスキューはたまたま通りかかったガイドが居ればガイドに頼むか、或いは気の毒だが“見捨てざるを得ない”という暗黙の了解の上に事が進んでいった。以下、冒頭のブライトホルンに戻るまでの間、現地での日程の順番に山行の様子を簡単に記すこととする。

さて、格安のトルコ航空機でイスタンブール経由チューリッヒに到着した我々は、電車でまずはフランスのシャモニーに入った。シャモニーでは生憎の天候で、滞在した４日間、山はおろか山麓も雨やガスの中で山々の姿を拝むことはできなかった。高度順応を兼ねてロープウェイでグランモンテ(3275m)を往復したり、ブレバン(2525m)へのハイキングもしたが、いずれも五里霧中の雪や雨の中であった。

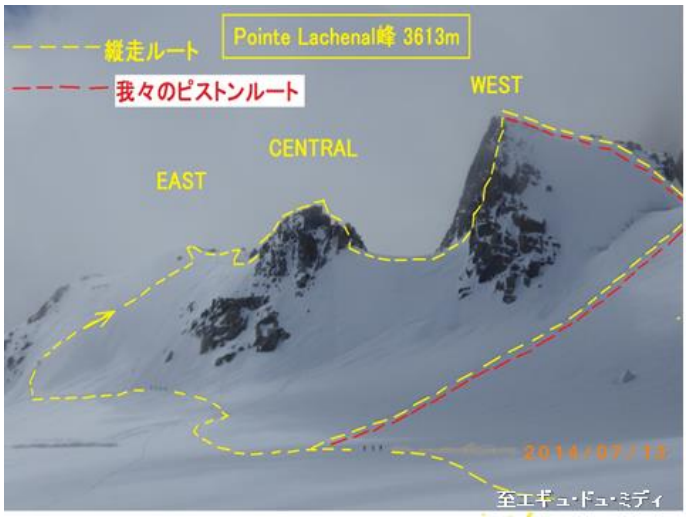
シャモニーでのターゲットであるモンブラン・ドュ・タキュールの登山情報を得ようと街の登山情報センターに立ち寄ったところ、モンブラン付近は先日からの降雪で雪崩の危険が迫っているためにタキュールへのガイド登山も全て中止となっているので、絶対に登らないようにとのことであった。その替り、“安全で易しい”山を推薦するから、そこに登ったらどうかと提案してくれたのが、タキュールの手前のPointe Lachenalという3616mトリプルピークの縦走であった。

（Pointe Lachenal ３座。現地HPより引用）

センターのオニイサンの話では、ここは雪が貼りついた岩山であり、懸垂下降や急峻なガリー登攀もあるが、ヨセミテデシマルで5.6程度のクライミングで易しいからと薦めてくれた。ガイドブックの写真も見せてくれたが、そのガリーが急峻そうであったので、もう少

し詳しく聞いてみると、「カムが２、３本必要だが、持っているか」と言うので、今回は持って来ていないと答えると、それではカムは無くてもシュリンゲを岩角に結べば何とか支点になるよとのご託宣であった。

そういう訳で、シャモニーでのターゲットを急遽 Pointe Lachenal に変更して、宿に帰ってオニイサンがコピーしてくれたガイドブックを仔細に検討した結果、オニイサン推薦の３座縦走はガイドレスの我々には難しそうなので、雪稜沿いに登れる主峰１座だけにピストンをすることにした。



(Pointe Lachenal 山頂)

実際に現地に行ってみてガスの僅かな切れ目から覗き見た限りでは、急峻なガリーは氷が張りついたミックスになっていて、とても 5.6 には見えなかった。我々の感覚では 5.9 くらいな気がした（海外のグレーディングは、同じ YDS でも日本のそれよりもプラス 0.2 程度の感覚になっていることが多い)。

さて、翌朝一番のテレフェリーク・ロープウェイに乗りエギュ・ドュ・ミディ駅(3842m)から急峻な雪稜をコル・ドュ・ミディのプラトーまで下ったが、濃いホワイトアウトで周囲の状況が全く分からなかった。タキュールも全く見えなかったが、その方向の下部に我々が目指す Pointe Lachenal が僅かなガスの切れ目から覗けたので、ホワイトアウトの中を登って来た。

さて、シャモニーでの悪天を補償してくれるかのように、次に移動したスイスのツェルマットでは好天が続いた。ツェルマットは街のどこからでもマッターホルンが眺められるが、我がタソガレ隊にはお呼びではないので、欧州アルプスでも一番登り易い山のひとつであるブライトホルン 4164m をターゲットに選んだ。

この山は、標高 3883m までロープウェイで登れるので、山頂までは残り標高差 300m 弱の登高で済むとルンルン気分でツェルマットの街を出発したのであったが、なかなかどうして足弱の小生には手強い山だったのだった。山麓のツェルマットから見ると、手前のゴルナーグラートの丘の向こうにほんの雪のコブか乳首の

ような小さな山にしか見えないが、近づいて見ると山頂部の絶壁の上に巨大な雪庇が覆い被さっているどっしりした大きな山容であった。

ツェルマットから乗ったロープウェイは、途中の支柱間のスパンが非常に長くて、また深い渓や急峻な山稜を跨いで行くスリリングな乗り物であった。マッターホルンがその角度を変えながら始終右手に見えた。R/W 終点のマッターホルン・グレッシャー・パラダイス駅(以前のクラインマッターホルン駅)を出てからアンザイレンした。ブライトホルンへはしっかりしたトレースが付いていて、このトレースをキープしている限りはクレバスに墜ち込む危険は無いと思われたが、万が一ホワイトアウトになればどこにヒドゥン・クレバスが隠れているかも知れないので、定石どおりアンザイレンしたのであった。これ以降のことは冒頭に書いたとおりであるが、以下冒頭の続きを書く。

赤澤さんや皆さんに叱咤激励されて、トボトボヨタヨタとブライトホルン中腹の長い長い雪の斜面を登って行った。歩き始めてまだ2時間も経っていないのに、このシンドさは一体何であるのか。出発前には高度順応のために富士山にも登ったのに、どうも高度順応ができていないのかも知れない。或いは、もう高い山には登れないロートル虚弱体質に落ち込んでしまったのか！？。コン畜生メ。

尻を叩かれながら長い長いジグザグをやっとの思いで登り切ると、360 度の展望が一気に開けた。もうここより高い地面は無かった。助かった！。そこはスイス・イタリア国境の細長い頂上の一角であった。西にはマッターホルンのピラミッドが旗雲を伴って天を突き、東側には欧州アルプス第２の高峰モンテローザが広大なゴルナー氷河の上に君臨していた。足下には登山口のクライン・マッターホルンの尖峰が屹立しているのが見えた。涙目になって景色が霞んできた。

何を隠そう、海外登山は何回もやってきたが、ハイキングやトレッキングを除けば、自慢ではないが未だ目標の高山の頂上に立ったことがない。高山病や悪天や性悪ガイドに足元を見られたりして、いつも中途敗退ばかりであった。

標高が低いとはいえ、今回初めて曲がりなりにも頂上を踏めたのはメンバーの皆さんの叱咤激励の賜物であるという感慨と、また、“これしき”の標高で高度順応ができていない不甲斐なさがこみ上げてきてない交ぜになり、涙腺が弛んだのであろうか。

ガイドブックによる標準コースタイムは登り２時間、下り１時間半、計３時間半であるが、我々は登り３時間、下り２時間、計５時間を要した。マ、この種のガイドブックは短めに書いてあることが多いし、古稀を過ぎたタソガレ・ロートルの小生にはまあこんなものかも知れないと秘かに自分を慰めている次第である。

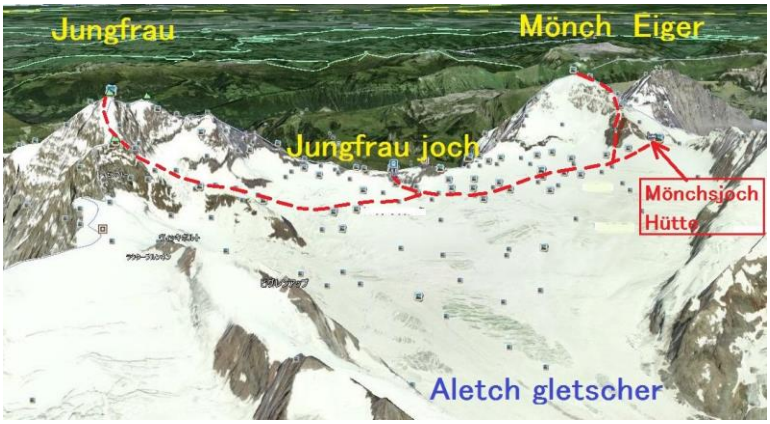
ツェルマットでは、ブライトホルン以外にもシュトックホルン(3532m)やオーバーロートホルン(3514m)へのハイキングも行った。また、宿は駅前のキッチン付ホテルに滞在したので、近くのスーパーでビールやワインやステーキ肉を大量に仕入れて来て、毎晩大宴会に明け暮れた。シェフはここでも川崎さんが務めた。

さて、次に最後の目的地スイス・グリンデルワルトに歩を進めることにしよう。
ここ暫くのアルプスの天候は５日単位で好悪を繰り返しているようで、グリンデルワルトに入るとまたまた雨空になってきた。天気の方まで「タソガレ」模様になってきたのか。

グリンデルワルトの名峰アイガーはグリンデルワルトの村から目の前に見えるが、我々が目指すメンヒやユングフラウはアイガーの陰に隠れて村からは見えないので、とりあえずこれらのベルナーオーバーラントの山並みを見るためにファウルホルン 2681m へハイキングを行った。折からアイガー・ウルトラ・トレールというトレランの大会があって、多くのランナーが走り登っていた。

（最奥の小さなトンガリ山がファウルホルン）

さて、メンヒとユングフラウは、今回の我が隊の最大の目標であった。その計画は、ユングフラウヨッホ駅からメンヒ 4207m に登り、その晩はメンヒヨッホの山小屋に泊まり、翌朝真夜中に小屋を出てユングフラウ 4158m に登りそのままユングフラウヨッホ駅に下山するというものであった。



天気予報では、暫くは雨であった。登山電車でユングフラウヨッホ駅まで登ってみると、案の定周りは全くのホワイトアウトで、ミゾレも降っている。この天気では如何ともしがたいので、メンヒとユングフラウ登頂は残念だが諦めて、予約しているメンヒヨッホの小屋に泊まり翌朝そのまま引き返すことにして、兎に角メンヒヨッホの小屋に向けて出発した。小屋までは１時間ほどの平坦な雪道であるが、濃いガスが立ち込めていて足下も定かに見えず、小屋へのトレイルを示す木のポールが僅かに霧の中にボ～と浮かんでいるだけだった。

（ユングフラウ）

（メンヒ、右端が南東稜）

メンヒヨッホヒュッテ

メンヒヨッホヒュッテまでは、天気さえ良ければ、残雪ハイカーも多いそうだが、悪天のために泊り客は我々とドイツ人の若者１人の５人だけだった。小屋の外にも出られず、何もすることが無かったので、広い綺麗な食堂でビールを飲みつつ窓の外に目をやったが、ガスが晴れることは無かった。

ところが翌早朝、何と陽が射し始めているではないか。ヒュッテ東方のフィッシャーホルンの山巓が紅く染まり、やがてヒュッテの目の前に聳えるトゥルクベルクの鋭い雪の稜線も輝き始めた。昨夜は新たな降雪があったようで、ヒュッテの周囲には30cmほどの新雪が積もっていて、昨日のトレースは綺麗に消されていた。ふと下の真っ白な氷河に目をやると、雪まみれの２人がアンザイレンで登って来ているのが見えた。このヒュッテに来る通常のルートは我々が来たユングフラウ方面からであるから、この２人は一体どこから来たのか。

（ロープもギアも服も凍りついて到着した女性２人組）

聞いてみると、アイガー東山稜から山中２泊してやっとここまで辿り着いたスイス女性２人のガイドパーティーとのことだった。お見事！！拍手で迎えて彼女達の壮挙を心からお祝いした。

我々もここで引っ込んではおられない。彼女達ほどの根性も体力も技量も無いが、折角天気が回復しそうになったので、せめてメンヒだけにでも登ろうではないかと、もう使うこともなかろうと昨夜ザックの底に仕舞い込でしまったハーネスやギアを装着して勇んでヒュッテを後にしたのであった。

小屋から15分くらい戻り、メンヒ南東稜の登山口に着いた。昨日は付いていたメンヒ南東稜へのトレースは新雪で綺麗に消えていた。目印となる南東稜の鉄杭が見えたのでアンザイレしてその方向目指して真っ白な雪原に足を踏み入れた。できるだけクレバスを避けるような方向を選んだが、周囲には明らかにクレバスが走っていると分かるヒドゥン・クレバスの窪みが走っていて、心穏やかではなかった。マ、墜ち込むとすればトップを行く赤澤さんの確率が高い。お気の毒ではあるが、万が一墜ち込んだ場合には出発前に決めていた「暗黙の了解」に従って貰うしかない。メンヒに登るパーティーは我々だけで辺りに人気は全く無かったので、「見捨てられて」“凍る体”になるのではあるまいか。

（イザッ、撤退！）

やがて、南東稜の末端に辿りついた赤澤さんから、ミックスになっている雪が凍っていて、登りは何とか行けるが、下降時に天気が悪化すれば懸垂で下りるしかないが、懸垂の支点が作れるピナクルも見当たらないようだ。また、谷筋に雲が広がり始めたので、天気予報のとおりホワイトアウトにな

りそうだから“残念だがここで撤退”と決定された。心残りであるような、一方でリタイアできると安堵したような・・。さすれば、ここに長居をすることもない。ユングフラウヨッホへのトレースに出てアンザイレンを解いた。未練垂らしくメンヒの頂上を見上げると、アレッチ氷河の源流部が崩壊し巨大な氷河の切断面が今にも落ちて来そうで肝を冷やした。大きく口を空けたクレバスや深いヒドゥンクレバスの断面も恐ろしい。

（アレッチ氷河源頭部の氷河崩壊跡）

さて、メンヒ(修道士)には多少なりとも足を踏み込むことが出来たので若干のご利益があったかも知れないが、もう一方の“若き貴婦人”ユングフラウには一指も触れることができず、その容色を遥かに仰ぎ見ただけで下山したのであった。それにしても、禁欲を旨とする“修道士”が毎日毎日“若き貴婦人”と相対峙しているというのは如何なものであろうか。

ユングフラウヨッホに辿りつく前に、山は予報どおりのホワイトアウトとなって、登山電車で下山したグリンデルワルトも雨であった。

ユングフラウ 4158m。
右下の黒い岩峰が、ユングフラウヨッホのスフィンクス展望台。
ユングフラウへのルートは左の氷河をコル迄詰めて右の雪稜から山頂へ。

今回は天候に恵まれず、目標４峰のうち当初の目標どおりに登れたのは１峰、目標を変更して登ったのが１峰、途中で撤退が１峰、全く手が付かなかったのが１峰という結果となった。赤澤リーダーの総評では、ハイキングを行ったことなども勘案すれば、今回は１勝１敗１引き分けとなるのだそうで、マアマアの結果かもしれない。下界でもスイスビールやフランスワインや観光も含めて随分楽しめたので、大満足であった。改めて、リーダーをやってくれた赤澤さんはじめ、坂井、川崎両氏にお礼申し上げる次第である。

それにしても、私のブライトホルンでのあの疲労困憊のザマは一体何だったのであろうか。偶々の高度順応不足にしては、標高が低すぎる。ひょっとして、誰かが冗談で言ったように、もう「筋力」をすっかり「金力」に代替させない限り海外の山（国内の高山も同様・・）には登れないのかもしれない。或いはまた、どうしても登るというＮ先輩のような根性が欠如しているためかも知れない。

どちらにしても、困ったものではある。情けなくて涙がチョチョ切れてくるのでア～ル。今回の山行は私にとっては、そのような厳然たる現実と夢幻（ゆめまぼろし）の乖離を叩きつけられた山行でもあった。嗚呼。了